

## ■プロコフィエフ/ヴァイオリン協奏曲第2番 ト短調 Op. 63

プロコフィエフが横浜経由でアメリカへ渡ったのは20代半ばだったが、30代になるとパリへ拠点を移し、モダンな作風で時代の寵児となる。だが、10年もたつと、その勢いは衰え、祖国での演奏会の成功をきっかけにソ連へ戻る機会を探り始めた。1936年、ショスタコーヴィチがプラウダ紙で「音楽のかわりに荒唐無稽」との批判をうけた、まさにその年、プロコフィエフはソ連に帰国する。

1935年に作曲されたヴァイオリン協奏曲第2番は西側で書かれた最後の作品。当時、ピアニストとしてヨーロッパ各地の演奏旅行に同行していたフランス人ヴァイオリニスト、ロベール・ソエタンのために作曲された。亡命した頃の第1番とは異なり、古典的な形式に基づく叙情的な旋律が美しい音楽で、ソ連時代の作風を予言している。

急・緩・急の伝統的な3楽章構成。第1楽章アレグロ・モデラートはソナタ形式。5拍のモチーフによる第1主題はロシアの民謡風、あるいは歌謡風の哀愁を帯びたメロディである。独奏ヴァイオリンが呈示する第2主題も抒情的。第2楽章アンダンテ・アッサイは三部形式。独奏ヴァイオリンが8分の12拍子と4分の4拍子が交代する優美な主題を提示する。第3楽章アレグロ・ベン・マルカートはA—B—A—C—A—B—A—コーダのロンド形式。カスタネットが入り、初演地のスペインを彷彿とさせる。コーダは4分の5拍子で、テンポをあげ、華やかに盛り上がり終結する。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、スネアドラム、バスドラム、トライアングル、シンバル、カスタネット、弦五部、独奏ヴァイオリン

※スコア上の表記